

▶復原前の住宅の様子（昭和47年頃）
奥に蔵・手前に納屋が見えます



▶現在の旧佐藤家住宅



【音又組みと梁】

上を見上げると、天井は無く、太い丸木と萱屋根の内側を見ることが出来ます。江戸時代の農家屋は、丸木を棟の位置で交差させる「音又組み」と呼ばれる骨組みと梁で屋根を支える造りが一般的でした。

壁

【大壁造り】

柱が外から見えない様に壁塗りされた壁のことです。旧佐藤家住宅は正面を除いた三方の壁がほぼ大壁造りで、正面と側面の一部は真壁造り（柱が露出）でつくられています。



修繕時の土壁を掻き落とした状況（木舞）

【土壁】

土壁は、柱と柱の間に、竹と木材・縄を使用して緻密な骨組み（木舞「カベゴメ」と呼ばれました）をつくり、壁土を塗っていました。

壁土は、藁などを混ぜて練り込み、発酵させて粘り気を出すなどの工夫がされました。

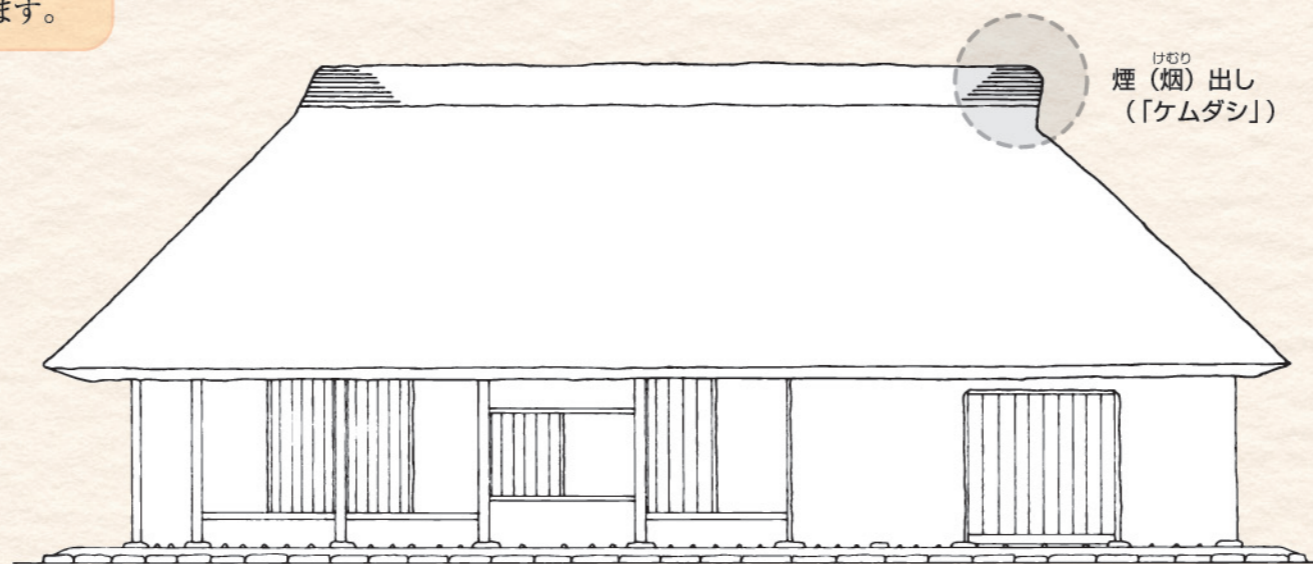
間取り

- 「なんど」（納戸）衣類や寝具などの収納と寝室の場所でした。
- 「ざしき」（座敷）客間として使われました。
- 「なかのま」（中の間）囲炉裏での調理や団欒・作業の場所でした。旧佐藤家住宅は、板敷ですが、土座の場合もありました。
- 「にわ」土間になっている場所で、道具を置き、作業場となりました。旧佐藤家住宅の「にわ」は、5本の独立した柱が建てられている特徴があります。

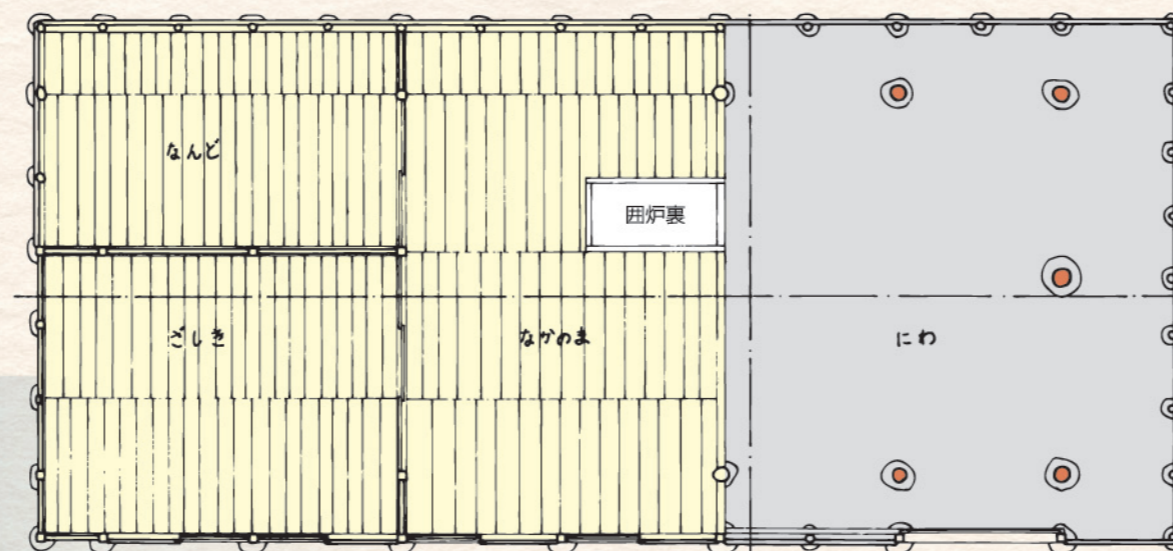
屋根

【寄棟造り】

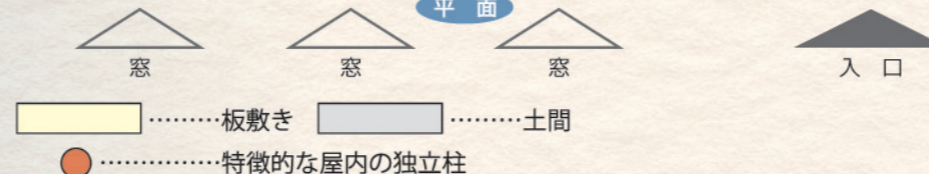
屋根は、前後左右の屋根各面が棟に向かって集まるような形をしています。



正面



平面



【囲炉裏】（「カマヤ」）

調理の場所・憩いの場所として屋内生活の中心が、囲炉裏でした。

調理の場所として、自在鉤が吊るされ、食材を乾燥させる棚が設けられるなど工夫されました。また、家の主人を中心に座る位置が決められ、家族はそれぞれの場所で、団欒の時間を過ごしました。



【番付】

当時の大工は、各部材に「いろは」や「番号」などを墨で書き、組み立てました。旧佐藤家住宅にも一部の木材に墨書きが見られます。



【木材の加工】

柱や梁は、現在の木材と違い、チョウナと呼ばれる大工道具で削った凹凸がいたるところに残っています。表面にも注目して、触ってみましょう。